

マタイ15章22-28節 「引き出す信仰」

1A 最大限に引き出される信仰 22

- 1B カナン人の救い
- 2B ルツの「私の神」
- 3B ナアマンの「七度の清め」

2A 声をかけられない苦しみ 23-24

- 1B 一言も答えないイエス
- 2B 女を去らせようとする弟子
- 3B 弟子に話しかけるイエス

3A 引き下がらない女

- 1B 単純な関係性「主よ、助けてください」
- 2B 子供と小犬
- 3B 食卓から落ちるパン屑

4A 立派な信仰

- 1B 信仰の本質「恵み」
- 2B すぐに与えられた癒し
- 3B 妨げを乗り越える信仰
- 4B 答えを聞くまで求める信仰

本文

マタイによる福音書 15 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが 14 章まで来ましたが、午後に 15 章を一節ずつ学びたいと思います。今朝は、22 節から 28 節に注目します。「**22 すると見よ。その地方のカナン人の女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けた。23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。弟子たちはみもとに来て、イエスに願った。「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」25 しかし彼女は来て、イエスの前にひれ伏して言った。「主よ、私をお助けください。」26 すると、イエスは答えられた。「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」27 しかし、彼女は言った。「主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」28 そのとき、イエスは彼女に答えられた。「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように。」彼女の娘は、すぐに癒やされた。」**

イエス様と弟子たちは、今、イスラエルの北にあるツロとシドンの地方にいます。そこは、フェニ

キア地方とも言われ、古くからカナン人が住んでいたところでした。もちろんユダヤ人ではなく異邦人で、かつて主がヨシュアに聖絶しなさいと命じられた先住民です。そのカナン人がイエス様のところに近づいて、悪霊につかれている娘を癒してくださいと願い出ます。ところが、私たちがこれまで見てきた、憐れみを示すのに早いイエス様とは、まるで正反対のイエス様の姿になっています。ちょっと信じられないですが、一切口をきかず、聞いても酷いと思われる言葉を投げかけられています。けれども、この女が最後に出した言葉にイエス様は「立派です」と言われ、その娘をすぐに癒されました。

1A 最大限に引き出される信仰 22

1B カナン人の救い

イエス様は、私たちと違って、全て人の心のうちにあるものをご存知です。「すべての人を知っておられたので、人についてのだれの証言も必要とされなかったからである。イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである。(ヨハネ 2:24-25)」ですから、イエス様は、このカナン人の女の心を初めから知っておられました。それでイエス様はかえって、彼女の信仰を最大限に引き出すために、このように試されたのだと思われます。立派な信仰を持っていることを知っておられたからこそ、一見、無視し、冷たくあしらひ、癒すことのできないような否定的なことも言われたのだと思います。神が自分を冷たくあしらっているように見えるとき、実はその反対に神が自分のことをよく知っておられて、ある意味で信頼しておられるからこそ、愛されているからこそ、そのように試されている、とも言えるのです。

日本語の言いまわしに、「押してだめなら、引いてみろ」という言葉がありますね。私たちが、イエス様の事を伝えている時にもその原則は当てはまります。ずっとイエス様を信じてほしいと願って、強く押していても、かえって引かれてしまうことが多かったところ、引いてみたら、逆につっこんできて、食らいついて聞いてくるということがあります。私の知り合いの牧師さんから、興味深い話を聞きました。東日本の津波震災後の救援活動・復興支援活動にて、自分たちの教会は支援はしても、伝道はしなかったそうです。恩恵を受けた人々に対しても、そのことをはっきりと言ったそうです。そうすると、かえってキリスト教について尋ねてきて、信仰をもって救われた人々が起こされたということです。これぞ、「押してだめなら、引いてみろ」の例であります。

2B ルツの「私の神」

聖書の中には、むしろ引かれたからこそ、立派な信仰を言い表した他の人物もいます。一人は、モアブ人ルツです。エリメレクと妻ナオミが、息子二人を連れてベツレヘムからモアブの地に移住しました。その間に夫に先立たれてしまいました。けれども、息子はそれぞれモアブ人の娘を妻にしました。ところが、その息子たちまでが死んでしまったのです。死に別れた寡が、ここに三人います。そしてベツレヘムを神が顧みて、飢饉が終わったという話を聞きました。それでナオミは、「あなたがたは実家に帰りなさい。」と強く勧めました。嫁の一人オルパは、ナオミに強く言われたので、

泣きながらお別れを告げました。ナオミはルツにも、オルパと同じように帰りなさいと言われました。ところが、ルツは食い下がったのです。「ルツ 1:16 お母様を捨て、別れて帰るように、仕向けないでください。お母様が行かれるところに私も行き、住まれるところに私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」モアブ人の女であるルツが、イスラエルの神を自分の神とし、その民を自分の民としました。夫に先立られ、姑にさえ「いっしょに行くな」と言われていたからこそ、この立派な信仰が引き出されたのです。

3B ナアマンの「七度の清め」

ナアマンのらい病の癒しのことも思い出します。彼はイスラエルの敵アラムの将軍でした。自分の女奴隷にユダヤ人がおり、イスラエルにらい病を治すことのできる預言者がいると聞きました。馬と戦車で行き、多くの贈り物も持ってエリシャの家まで行きました。ところが、彼自身は出てこず、しもべを送って、「ヨルダン川へ行って七回あなたの身を洗いなさい。(2列 5:10)」彼は憤激しました。「2列 5:11 何ということだ。私は、彼がきつと出て来て立ち、彼の神、【主】の名を呼んで、この患部の上で手を動かし、ツアラアト(らい病)に冒されたこの者を治してくれると思っていた。ダマスコの川、アマナやパルパルは、イスラエルのすべての川にまさっているではないか。これらの川で身を洗って、私がきよくなれないというのか。」しかし、しもべたちが引き留めたんです。難しいことを命じたのであれば、あなたはそれをなさったのではないですか？あの方は、「身を洗ってきよくなりなさい」と言っただけではありませんか、と。難しいことならばやろうとするが、こんな簡単なこと、単純なことならばむしろやらない、ということ。そのことを悟って、ヨルダン川で七度、浸かったら、赤子の皮膚のようにきれいにされました。彼の場合は、敢えて簡単なことを言われて、突っぱねられたことによって、むしろ彼のうちにある素直な信仰が引き出されたのです。

2A 声をかけられない苦しみ 23-24

主はこのようにして、それぞれに合った方法で信仰を引き出してくださいます。本文に戻って、カナン人の女の話じっくり見ていきましょう。

1B 一言も答えないイエス

22 すると見よ。その地方のカナン人の女が出て来て、「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。娘が悪霊につかれて、ひどく苦しんでいます」と言って叫び続けた。23 しかし、イエスは彼女に一言もお答えにならなかった。弟子たちはみもとに来て、イエスに願った。「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

女は、他のユダヤ人が叫んでいるのと同じように叫びました。「主よ、ダビデの子よ。私をあわれんでください。」ということですが、ダビデの子とはメシアのことです。ユダヤ人のために来られる救世主として、ユダヤ人の王、神の国を立てられる方として、ユダヤ人はダビデの子という呼び名を、

メシアあるいはキリストに与えていました。その呼び名をカナン人の女が使ったのです。けれども、イエス様は反応されません。「一言もお答えにならなかった」とあります。彼女は所詮、異邦人です。ユダヤ人のメシアの称号を使って何になるのか？という言い分は、冷たい言い方ですが、これは正しいことです。

ところでカナン人が経験したように、自分が祈っているのに、それにふさわしい答えが返ってこないという経験をされたことがあるでしょうか？祈っても何ら変化が見えないし、むしろ状況が悪化しているようにも見えます。でも、自分の必死な状況は変わらないのです。しかし、ここで堪えて、さらに尋ねるのです。

2B 女を去らせようとする弟子

しかも、弟子たちも女を煙たがっています。「あの女を去らせてください。後について来て叫んでいます。」弟子たちが、何をもってそういったのか二つの意味に分かれます。一つは、とにかく、追いつくこと。もう一つは、「主よ、とっとと癒して、彼女を去らせてください」と言っているのか、であります。おそらく後者でしょう、というのはイエス様は、彼女がイスラエル人ではないことに拘っておられるからです。異邦人に癒しの業を行うようにわたしは召されていないということを語られました。

自分が主を熱心に求めている中で、このような経験があるかもしれません。主から答えがないばかりか、「あなたは、なぜこんなことに拘っているの？もういい加減、あきらめなさいよ。」と言われるかもしれません。むしろ、祈りが聞かれていないような時に、人々の支えがなくなります。もしかしたら、御心なのではないのではないかと仲間のキリスト者からあしらわれるかもしれません。

3B 弟子に話しかけるイエス

そしてイエス様は、ようやく口を開かれるのですが、話しておられるのは女に対してではなく、弟子たちに対してなのです。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」と言われますが、語っている相手はあくまでも弟子たちなのです。

3A 引き下がらない女

ここまで言われたら、もうあきらめのが普通でしょう。けれども、女は引き下がりました。

1B 単純な関係性「主よ、助けてください」

「25 しかし彼女は来て、イエスの前にひれ伏して言った。「主よ、私をお助けください。」」彼女の訴えは、とても単純なものになりました。いいえ、むしろこれが真実なものと言ったらよいでしょうか？ユダヤ人とか、異邦人とかではなく、ただイエス様の前にひれ伏す。死にかけていた娘を癒してほしいと願ったヤイロもそうでしたが、彼は会堂司でした。霊的には高い地位にいましたが、けれどもイエス様の前にひれ伏したのです。そして彼女は、ダビデの子よ、という言葉を使わずに、

ただ「主よ」と言ったのです。これだけが、主と自分との関係をよく表している言葉です。何も余計な言葉をつけずに、イエスが自分にとって主なる方、全権を持っておられる方なのです。

私たちは、イエス様の前に近づくときに、余計なものをいっしょに持って行ってしまうことがあります。けれども、これだけでいいのだというものがあります。先ほどのナアマンはそうでしたね。しかしここにまで来るのに、私たちは時に無視されているような気にさせられることがあるでしょう。ですから、食い下がって、自分自身が余計なものを削いでいただくようのです。

2B 子供と小犬

するとイエス様が言われました。「**子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。**」この子供たちのパンとはイスラエル人のことで、小犬とは異邦人のことです。イスラエル人こそが、神の子どもたちとして召された者たちです。その周りに、小犬のペットのようにそばにいたとしても、その子をさしおいてどうして犬に食べ物を与えるのか？とイエス様は言われます。先ほどいいましたように、これこそ正論なのです。

3B 食卓から落ちるパン屑

イエス様ご自身から、はっきりと正論を言われて断られているのにも関わらず、女はなんと驚くべきことを話します。それが次の言葉です。「**主よ、そのとおりです。ただ、小犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。**」

ここで驚くべきことは二つの点です。一つは、主が言われていることを認めていることです。主よ、そのとおりですと言っています。多くの人は、主が言われているのにそれを受け入れないで、要求だけします。主が言われたことは、しかり、その通りなのです。自分には受け入れる価値などないということを知るべきなのです。多くの人が、神が罪に対して怒られ、裁きを行われることについて、それは酷すぎる、愛がないといって訴えます。その通りです、あなたはそのようなことを行なわれることは正しいのです、と言えるかどうかであります。そしてもう一つが、「**パン屑はいただきます**」ということ。主は、寛容な方であるということです。ほんの食べ残しもなく、与えるものは何一つないということ、小犬にしません。同じように、神は契約から除外されていた異邦人であっても、それでも恵みを施すということを知っているかどうか、であります。

4A 立派な信仰

このことをもって、イエス様は彼女の信仰を「**立派**」と言われました。

1B 信仰の本質「恵み」

午後の礼拝で詳しく話したいと思いますが、彼女が言い表したことは、神のとてつもない壮大な計画、つまり、ユダヤ人への約束がキリストにあって異邦人にも及ぶという救いのご計画を言い表

していたものです。その根底にあるのは、「恵み」であります。受けるに値しないのに、それでも受ける祝福です。本来、与えられべきではない救いを、異邦人にも及ばせてくださるのは、神の恵みに他なりません。私たちは、神の恵みがいかにすぐれているか、偉大であるかを知るのは、本当に至難の業です。実に、神の聖霊なしには不可能と言って良いでしょう。使徒パウロは、恵みを知るためには永遠がかかると言っていました。「エペソ 2:7 それは、キリスト・イエスにあって私たちに与えられた慈愛によって、この限りなく豊かな恵みを、来たるべき世々に示すためでした。」

2B すぐに与えられた癒し

そして、イエス様はすぐにでも祈りを答えてくださることを知ることができます。「彼女の娘は、すぐに癒やされた。」とあります。イエス様に癒す力がなかったのでもなく、また癒す意志がなかったのでもありません。カナン人の女にある信仰を引き出して、その信仰にしたがって癒したいと願われていたのです。ですから、イエス様がやるとお決めになったら、すぐにでもやるのです。御霊の働きを期待しましょう。主は必ずやってくださいます。

3B 妨げを乗り越える信仰

これまで見てきたように、私たちの信仰に必要な要素をまとめたいと思います。一つは、忍従といったらよいでしょうか。難しい言葉ですねえ、忍耐強さ、しぶとさ、しつこさといったらよいでしょう。カナン人の女は、無視に直面しました。偏見に見えることに直面しました。疎外されました。無視、偏見、疎外、これらが神に近づくのに妨げにならなかったのです。最後は、まっとうな意見に直面しました。これが最もやっかいな妨げではないでしょうか？真面目な人であればあるほど、規則正しい人であればあるほど、実はあきらめ度が強いのです。あの金持ちの青年のように、貧しい者たちに全財産を売って施しなさいと言われた時に、悲しい顔つきになってイエス様から離れてしまうのです。しかし、それでもイエス様に食らいつくというしつこさ、ねちねちさ、しぶとさが必要です。

4B 答えを聞くまで求める信仰

そして、仮に願いが聞かれないことがあります。しかし、そこまで祈っているならば、自分に与えられた神の恵みを知ることができます。「Ⅱコリ 12 章 12:8-9 この使いについて、私から去らせてくださるようと、私は三度、主に願いました。しかし主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。わたしの力は弱さのうちに完全に現れるからである」と言われました。ですから私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。」そして、もう一つの答えはもちろん、願いが聞かれるということです。イエス様は女に、「あなたが願うとおりに。」と言われました。わたしの恵みはあなたに十分である、と言われるにしても、あなたが願うとおりにするように、と言われるにしても、そこまで主から答えが与えられるところまで祈るのだということです。あとは、時がまだ来ていないということもあるでしょう。ハバククに対して、「2:3 この幻は、定めの時について証言し、終わりについて告げ、偽ってはいない。もし遅くなっても、それを待て。必ず来る。遅れることはない。」と言われました。